

マレーシア地域研究のための基本文献

【事典・年鑑】

○桃木至朗他編『[新版 東南アジアを知る事典](#)』平凡社、2008年。

東南アジアの重要事項を理解するうえで最良の事典。マレーシアに関する事項の解説や国別の解説も充実している。

○アジア経済研究所編『[アジア動向年報](#)』アジア経済研究所、各年。

★所蔵状況は、次の双方の版を参照：[市販版](#)、[アジア経済研究所発行版](#)

国・地域別に各年のアジアの政治・経済・外交の動向をまとめた年報。過去の出来事や情勢を知るのに便利。

【入門書・概説書】

○綾部恒雄・石井米雄編『[もっと知りたいマレーシア\(第2版\)](#)』弘文堂、1994年。

最も基本的な入門書。現時点では内容がやや古くなってしまったが、マレーシアの歴史、民族と言語、文化、社会、政治経済、日本との関係などをバランスよく解説している。

○水島司編『[アジア読本 マレーシア](#)』河出書房新社、1993年。

生活体験やエピソードをふんだんに織り交ぜた個性的な入門書。『もっと知りたいマレーシア』ほど体系的ではないが、親しみやすさではこちらが上だろう。

○宇高雄志『[住まいと暮らしからみる 多民族社会マレーシア](#)』南船北馬舎、2008年。

住まいという切り口から多民族社会の多様な日常生活をわかりやすく示してくれる好著。挿し絵がふんだんに盛り込まれていて、イメージをかきたててくれる。

○ラット(荻島早苗・末吉美栄子訳)『[カンポンのガキ大将](#)』晶文社、1985年。

1950年代のマレー半島のカンポンを舞台とした絵本。地方に住むマレー人ムスリムの日常生活やマレーシアの社会史を生き生きと視覚的に感じることができる。

★図書館では、[新訳](#) (『カンポンボーイ』稗田奈津江訳、東京外国語大学出版会、2014刊) も所蔵

【通史】

○池端雪浦編『[東南アジア史II 島嶼部](#)』(新版 世界各国史 6)山川出版社、1999年。

東南アジア島嶼部の通史の基本書。東南アジア島嶼部の通史の流れをつかむことで、「マレーシア」という枠組みが歴史的に形成されたことが理解できる。

○ザイナル・アビディン・ビン・アブドゥル・ワーヒド編(野村享訳)『[マレーシアの歴史](#)』山川出版社、

1983年。

日本語で読めるマレーシアの一国史。内容がかなり古くなってきているが、マレーシア独立以前の歴史に関しては参考になる。

【専門書】

<社会と文化>

○立本成文『[共生のシステムを求めて——ヌサンタラ世界からの提言](#)』弘文堂、2001年。

マレーシアというよりはマレー海域世界から多元的な共生の可能性を探ろうとする提言の書。二者関係のつながりによって形成されるネットワーキング型社会が描き出される。

○多和田裕司『[マレー・イスラームの人類学](#)』ナカニシヤ出版、2005年。

イスラーム復興が進むマレー人社会の現実を理解するうえで最適の書。イスラーム世界や国家の大きな動きと、地域社会のムスリムの日常生活との関わりがよく分かる。

○石川登『[境界の社会史——国家が所有を宣言するとき](#)』京都大学学術出版会、2008年。

空間や領域という切り口から国家と社会の成り立ちを明らかにすることを試みる挑戦的な著作。ボルネオ島のマレーシアとインドネシアとのあいだの国境社会から考える。

○信田敏宏『[周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化](#)』京都大学学術出版会、2004年。

イスラーム化という現象を改宗される先住民の側から論じた力作。先住民オラン・アスリ社会における経済的格差とイスラームへの改宗との間の関係が解き明かされる。

○宇高雄志『[マレーシアにおける多民族混住の構図——生活空間にみる民族共存のダイナミズム](#)』明石書店、2009年。

マレーシアの多民族共存の歴史と現在を居住空間という場から明らかにする著作。農村、都市、郊外などさまざまな生活の場における民族間関係の実態を多角的に分析している。

○鴨川明子『[マレーシア青年期女性の進路形成](#)』東信堂、2008年。

マレーシア人女性の教育機会拡大と進路展望に関する実証研究。教育やジェンダーに関するマクロの考察と、中等学校での調査に基づくミクロの分析が結びつけられている。

<歴史>

○木畑洋一『[帝国のたそがれ——冷戦下のイギリスとアジア](#)』東京大学出版会、1996年。

第二次世界大戦後のイギリスとアジアとの関わりに注目した国際関係史の好著。脱植民地化という文脈の中でマラヤの独立やマレーシアの形成を理解する際に参考になる。

○原不二夫『[マラヤ華僑と中国——帰属意識転換過程の研究](#)』龍溪書舎、2001年。

マラヤ華人のアイデンティティの歴史的展開を探る重厚な研究。左派を中心とする華人と中国との関係を丹念に跡づけながら、帰属意識の変化を追っている。

○山本博之『[脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成](#)』東京大学出

版会、2006年。

英領北ボルネオ（サバ）を舞台に民族が形成される歴史的過程を明らかにする本格的な研究書。複数の民族アイデンティティの間の競合や相互作用が動的に描かれている。

○ポール・H・クラツカ(今井敬子訳)『[日本占領下のマラヤ](#)』行人社、2005年。

アジア・太平洋戦争期の日本占領下のマラヤを包括的に分析した労作。とくに占領下の社会経済に関する分析が詳しい。

<政治と経済>

○金子芳樹『[マレーシアの政治とエスニシティ——華人政治と国民統合](#)』晃洋書房、2001年。

マレーシア政治史の基本書のひとつ。マレーシア華人の政治力学と多民族国家における国民形成に焦点を当てる。1969年の民族暴動に対する複眼的な分析も興味深い。

○鈴木絢女『[民主政治の自由と秩序——マレーシア政治体制論の再構築](#)』京都大学学術出版会、2010年。

マレーシア政治体制の持続的安定に対する新たな分析枠組みを探る意欲作。諸政治勢力の間の支配・被支配関係ではなく、協議や相互主義というルールからの説明を試みる。

○吉村真子『[マレーシアの経済発展と労働力構造——エスニシティ、ジェンダー、ナショナリティ](#)』法政大学出版局、1998年。

マレーシアの経済発展と労働問題を社会構造との関わりの中から多角的に探る著作。民族間関係、女性の地位、外国人労働者問題など多岐にわたる問題を論じている。

○穴沢眞『[発展途上国の工業化と多国籍企業——マレーシアにおけるリンケージの形成](#)』文真堂、2010年。

多国籍企業がマレーシアの工業化に及ぼす影響を分析した本格的な研究書。リンケージという側面に注目する。日系企業の役割についても詳しく論じられている。

【学術雑誌】

マレーシアに関する論文が掲載される日本語の学術雑誌には以下のようなものがある。

○『[マレーシア研究](#)』(日本マレーシア学会)

○『[東南アジア 歴史と文化](#)』(東南アジア学会)

○『[東南アジア研究](#)』(京都大学東南アジア研究所)

○『[アジア研究](#)』(アジア政経学会)

○『[アジア経済](#)』(アジア経済研究所)

○『[アジア・アフリカ言語文化研究](#)』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

(2014年3月 左右田直規)